

上腕尺側一橈側連続皮静脈グラフトによる末梢バイパス症例

旭川医科大学 血管外科

多田 裕樹 (ただ ゆうき ; 31 才)

上腕尺側一橈側皮静脈を連続した single vein として採取し末梢バイパスを実施した。メリットは、グラフト間の composite 吻合が回避できる点と、両端が静脈中枢側となるため、両端のグラフト口径の確保が容易となり、近位末梢宿主動脈への吻合にも適合しやすいと考えた。51 歳男性。DM, 高度心機能低下 (EF17%) 透析管理症例。両下肢 CLI (R-IV)。初回総大腿一膝下膝窩動脈バイパスを実施。宿主末梢動脈病変進行でグラフト閉塞し、足趾潰瘍で虚血再燃。利用可能残存静脈は非シャント肢の上腕皮静脈のみで、大腿一後脛骨動脈バイパスを計画。動脈吻合部露出後、上腕尺側一橈側皮静脈を連続採取後、両皮静脈の弁を破壊し、ヘパ生注入加圧下にグラフトを両吻合間の皮下トンネル内に誘導し、全身ヘパリン化後に両吻合を実施した。術後下肢の虚血症状は軽快した。術後 7 か月後のグラフト吻合部修復時の造影では、グラフト本体部に狭窄は認めなかった。